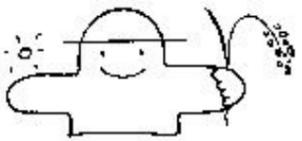


庄内協同ファームだより
 発行NO.106 2005年3月
 〒999-7631 山形県東田川郡陸奥町八色木字西野388
 電話 0235-78-2120 Fax 78-2140
www.mwnet.or.jp/~shonai/ky/index.html



豊かな自然環境を大切に

庄内近況 事務局 白澤吉博 3月3日

また、雪だ。！
 今年は何度もきく。それほどいつもの年より雪が多い。例年の2倍の積雪だそうだ。3月になっても、庄内平野が白い雪に覆われている。雪の解ける時期が遅くなると、春の農作業への影響が懸念されるが、この時期、農家は春から作付けする作物に、様々な思いの絵を描く。

生産者グループとして2月12日と13日に、地域の生産者や行政、教育関係者と一緒に、「環境創造型農業研修会 in 庄内」湛水生き物調査（ふゆみずたんぼ）の研修会を開催。さらに庄内平野に有機栽培が広がることを願い積極的にかかわった。この研修会には94名の参加者があった。

冬の間、田んぼに水をため、米ぬかなどを入れ、光合成細菌や土の中の生き物の活動でトトロの土をつくり、周辺の虫、鳥の活動を促し化学農薬や化学肥料に頼らないで米栽培をする。その田んぼの生き物を調査することで、生き物の多様性を理解し稲作技術に応用し、環境とよりより関係をつくっていく。

これまでのトトロ栽培から冬期湛水するトトロ栽培。うまくいけば究極の？自然と調和する稲作技術習得。

すでに、取り組んだ経験のある生産者も研修会後、あらためて、生き物との関係を明らかにすることの意義を確信し、さらに深めていくことで、有機稲作技術のもう一つ方法が見えてきたと話す。

実践内容は深く、地域的な広がりをもつ活動である。そういう私も、今年、頼みこんでかりた圃場1枚（18a）を試みて、「田んぼの生き物・曼荼羅」の世界を楽しむことにした。

2月22日にグループの生産者集会が開催され栽培実績、計画や環境活動の総括が話し合われた。午後からは、稲作技術の研修会を企画。講師に、福井で35町歩の大規模有機稲作経営をしている藤本氏をお招きし、彼を囲んでの「微生物農法」など技術研鑽の話しに大いに賑わった。この研修会には地域の生産者も参加した。

庄内地方をおそった、昨年8月の台風による潮害規模は、230年ぶりの出来事という。めったにありえない2年続きのひどい不作で、お餅やお米の原料不足が、今年もおきてしまった。その反省にたち、05年産水稻の作付け量を大幅な増量計画にした。収穫量で120%以上の増。消費者に迷惑をかけない産直産地、庄内協同ファームのプライドをかけた覚悟である。05年産米を、今からお願いしたい。

お米だよりから、同じ紙面スタイルで約10年続いているこの「庄内協同ファームだより」も、半年ぶりの発信。組合員生産者が、日々の思い、生活スケッチして感じ捉えたことを直接伝える媒体としてある。

毎回、それぞれの伝え手に個性があり、楽しみにしていた方も多かったはず。滞りは、発信もと事務局の不徳とするところである。次々の発信に努めたい。春一番の声



がきこえた地域もあるそうだ。にぎやかな鳥たちのさえずりに、まけない、多くの伝えたい思いが庄内の生産者にある。つづく便りに期待を。雪の中に、近づく春の気配がする庄内平野から。

.....

「イチ子の遺言」を手にして

2月25日 志藤知子 藤島町

“節分の朝、猫の足跡がつく位の新雪が降ると、その年は大雪になる。”とは、庄内に古くから残る言い伝えである。

その言葉通り、今年は、近年にない大雪に見舞われている。ふわふわと一気に降り積もる雪は、本当に美しいが、日々の除雪はひと苦勞である。それでも、今年の冬も、あとわずか、きのうまでの寒さがうそだったかのように緩みも早い。

どっぴり雪に包まれたこの冬、機会があって、提携米でお世話になっている橋本明子さんから贈られた「イチ子の遺言」を読むことができた。イチ子さんは、実在の人物で、山形県高畠町で有機農業を営む片平潤一さんの妻。同じ県、同じ年、同じ農婦、そして有機農業というつながり.....彼女に一体何があったのだろう、という思いで読み進んだ。

農家に嫁ぎ、有機農業の実践を軸に、毎日を精一杯生きたイチ子さんの働きぶり、頑張りようは、忙しい時の自分とだぶって、文字から映像が見えてくる程、良く理解できる。目の前に広がる農作業も、家事も、援農に訪れる人との交流も食事の世話も、次から次と手際良くこなすイチ子さん。

一時も頭も体も休めず段取り良く進めて行かなければとてもこなせる仕事量ではないことも容易に想像できる。忙しい時期ならばイチ子さんは”どこにでもいる農村女性”である。

精一杯の労働で、夫に同志と言わせる程



に、肩を並べて作業に励み、経営のやりくりをし、万端ぬかりなく家事をこなした彼女は、夫を信頼し、自分の暮らしぶりや生き方に誇りを持ち、生き生きと輝いていた.....それは決して演じられたものでなく、正直に真摯に、自分の人生を生きぬく彼女の人柄だったのでないだろうか。

不幸にして病に冒され、52才という若さで逝ってしまった事実は、本当に残念なことだけど、煩雑な家事労働と、なだれ込むように襲いかかる毎日の農作業によって潰されたのではないと考えるのは、ある意味似たような境遇の中で生きる農婦の一人だからなのだろうか。

確かに、固有の財産も持たずに、長らく無報酬に近い形で頑張り抜いてきたことは、周りから見ればあまりにも痛々しく、もう少しどうにかならなかったのかという思いが募るのも良く理解できる。

けれども、経営における決定権も持たされず、世間に出て積極的に学習する余裕もなかったイチ子さんが目の前に広がる膨大な作業や、家事、通信に自分の能力や才能を生かす以外に生きがいを求める道があっただろうか。有機農業の先分けとして、すべての希望や生き甲斐を有機農業の実践に託し、誰も経験したことのない道を夫との二人三脚で必死に歩いてきた道のりを学び、与えられた立場で、力強く、持てる力を出し切って頑張ったイチ子さんに心からのねぎらいを贈りたい。

その上で肝に銘じたことは、「何よりも健康が基本。」少し頑張りすぎるとすぐに悲鳴を上げるようになってしまった自分の体をいたわりつつ“焦らずに、ゆっくりと”を心がけ、イチ子さんが迎えられなかった“53才”を乗り切りたい。

外は、又、雪。白いかたまりがふわふわと落ちて来る。こんなふうに、あたたかいこたつの中で、穏やかに降って来る雪を美しいと思いながらながめる時間がイチ子さんにもあったらどうか。

